

連載

哲也製

かごしま

心の特産品

半世紀も前のことだ。正月前になると、わがやは小さな物産店なみに賑やかになった。お客だけではない。所狭しと頂き物が並ぶのだ。

父は馬喰をしていたから、付き合っても顔も広がった。ほどこしほどこしというのが口癖だったが、むろんほどこしだから、お返しなどアテにはしていなかっただろう。

床の間には、焼酎瓶と砂糖の箱がひしめいた。座敷の欄間の下の長押には、縄にくくられた鯉節や焼き海老や焼き鮎が、さながら大奥のスタレのようにぶら下がった。枕崎の鯉節や出水の名古の焼き海老や阿久根の煮干しは、父が行商のご婦人たちから買い込んだものだった。

これらが家中に醸し出す匂いは、海の二〇〇%濃縮還元臭のようなものだった。私は張り替えたばかりの真っ白な障子紙を、ちよびりかわいそうに思った。

やがて鹿児島島に出た私は、納屋通りを歩いてこれと同じ



臭いに出くわすのだが、そのたびに私は、あつ、納屋通りはいつも師走をやつてると思ったものだ。

広い玄関には、ぎつしりと炭俵が立った。俵には炭の格を示す「檜子丸」という印字が打つてあった。私は姉に、「お正月で、かしこまるから、カシコマル？」と聞いたことがあった。そして、「この子は面白いことを言う」と言われ、ちよびり得意になったことを覚えている。

炭のほかに、巻いた荒縄を届ける人、藁ぞうりを届ける人もいた。藁ぞうりは、川で鮎とりをする時くらいしかはかなかったが、暮れのぞうりの緒には、必ず赤い布が絡りこまれていた。その赤が、海老の赤い色や、南天の赤い実とともに、正月を待ちわびる私の心にはのかな灯りをともした。

ロケットのようなクリスマスツリーもいいが、唐辛子ほどのものだって、心がこもっていれば、人の心を明るく暖かくしてくれるものだ。

わがやで作った手造りの味噌や醤油を持参する人もいた。黒砂糖もあった。その頃の黒砂糖は、薄いレンガのような固まりだった。そして、その端つには、必ずどこか新聞紙がこびりついていて、まさに、わがやはさながら、田舎の物産館であり、気安いたまり場だった。

父は訪れる人や酔客の相手をしたり、勢ぞろいした海の幸や山の幸を眺めながら相好を崩した。アテにしていなくても、頂くと嬉しいものが、この世にはあるのだ。

この賑やかさが、大晦日になると変化した。くさぐさの品は納屋や押入れに片付けられた。変わつて床の間には、お鏡と父が薄端に活けた松竹梅が飾られた。前庭には白砂がまかれ、門を門松が飾った。

これらは世間様への挨拶でもあったが、年神様

第二回 正月前後 物産館になるわがや

おかだ 哲也

1947年、出水市生まれ。東京大学中退。詩集「海の陽山の陰」に「ぼん子守唄」、エッセイ集「不知火紀行」「詩季まんだろ」(上、下)など著書多数。近著に現代詩人文庫「岡田哲也集」。様々なところに詩評、随筆を執筆中。南日本文学賞受賞。平成4年度県芸術奨励賞受賞。



を迎えるささやかな儀式でもあった。門では、お盆には迎え火や送り火を焚いた。その頃、私たちの中には、年神様や亡くなった人々が、生きているもろもろと同じく、ゆかしく生きていたのだ。

そんなのは嘘っぱちだ、神も仏も先祖もいないよ、という人もいよう。おそらく、こういう人が、虚礼廃止などというようなことを言い出したのだろう。

だが、人になにかをあげたり、贈ったりする心の底には、打算や目論みでなく、虚々実々を超えた、もっと深いなにかがあるのだ。それは、人間本来の生産や愛と結びついたものだと思う。

いずれにせよ、いささか猥雑な年の瀬から清楚な正月へと、わがやは衣替えをした。

おそらく、人が年をとるというのも、心の衣替えをするということなのだろう。年輪が、なにかを身につけた証か、それともなにかを捨てた証か、人によっても違うだろうが。